

ヒュームにおける自我概念

村野宣男

近世における自然科学の成立以来、自然現象は数学的・論理的に扱われて来た。すなわち、自然現象は自然科学の諸法則を前提として演繹的に把握されている。数学的・論理的関係は、前提から結論を導き出すことを本質としているので、あたかも自然科学は数学や論理学と同一の基盤に立つかの観を呈すが、はたしてそうであろうか。

単に数学や論理学を知っているからといって、世界に関して何らかの知識をもっているわけではない。数学や論理学は自然科学の諸法則間の関係を推理したり整理する役割をもつが、自然科学の法則そのものを生み出すことはできない。数学や論理学は経験にかかわるものではない。一方、自然科学は具体的経験にかかわり、経験界における関係を求める。ここに世界に関する知識としての自然科学の法則が得られる。例えば、落体の法則にしても、時間・空間的観点における物体の運動という具体的経験にかかわるものである。たまたま落体の運動が時間・空間とのかかわりにおいて恒常性をもっているので法則は数学的に表現される。しかし、自然が恒常的關係で表現されるということは、今までの経験から言えることであり、新たな経験はこの関係を否定する可能性を常にもつ。経験的に一定の關係が繰り返されるところから恒常的關係が得られるのであり、この關係は数学的・論理的關係である必然的關係とは異なる。

数学的・論理的關係と自然法則とはしばしば混同されがちであるが、この両者を明確に区分しようとしたのがイギリスの経験論者、デイヴィド・ヒューム (David Hume, 1711-1776) である。ヒュームは、経験を通し

て自然に関しての知識を獲得しようとした。そして知識の型をいくつか挙げていますが、その第一に位置するのが因果関係である。われわれは自然法則によって新たに世界を把握し開拓するが、ここには因果の論理が大きな役割をはたしている。原因に対して結果が得られるのであるが、原因と結果との恒常的かかわりは科学法則として表現される。科学的法則は因果のかかわりの中に組み込まれている。したがって因果関係は世界を把握し開拓する上で重要となるが、ヒュームは経験界における知識を構成する他の要因として、類似性・同一性・時間における関係・量と数における割合・質における程度、対立等の関係を挙げている。¹⁾本論では、このうち同一性 (identity) の関係を取り上げたい。特に自我の同一性 (personal identity) の問題を考察する。因果関係は、二つの対象間に設定されるものであるが、ここでは二つの対象そのものの同一性が確立されていなければならない。又、対象は自我によって捉えられるのであれば、自我の同一性が前提される必要がある。したがって自我の同一性は知識の根本的条件となる。しかるにヒュームは、自我の a priori な同一性に関して懐疑を示す。自我の同一性が崩れるならば、哲学的体系そのものが崩壊するであろう。しかし、ヒュームは世界を崩壊させることを意図したのであろうか。ヒュームの自我概念の検討を通して、ヒュームの懐疑論の真意を探ってみたい。

1

まず物質界における対象の同一性の問題をみたい。この問題を扱うのと同ーの方法が自我の同一性に関しても用いられているからである。例えば窓外に見える一本の木あるいは一軒の家は昨日も今日も同一のものであると考えている。しかし厳密に考えてみると同一なのであろうか。木は少しは成長したかもしれないし、家も汚れてきているかもしれない。ここからヒュームの懐疑が始まる。

ヒュームにとって確実なものは、数学的・論理学的関係と感官(sense)より生ずる知覚(perception)²⁾である。知覚は現実に存在するもので疑うことができない。ここにヒュームの徹底した経験論の立場が表明されている。そして連続する知覚は決して同一ではないところに対象の同一性が疑われる根拠がある。ヒュームは連続する知覚の中に同一対象を認める一般的傾向を批判して次のように述べる。“しかし、継起をその推移全体においてみるのではなく、考察を別の角度から行って、ある二点における継起に注目し、継起する特質の相異なる状態を比較するとき、前には気づかれなかった変化が現われるのであり、同一性が完全に破壊されるように思われる。”³⁾知覚の厳密な同一性の有無という極めて論理的な根拠にヒュームの懐疑論は基づいている。いわば、ここには理性(reson)あるいは推論(reason)が働いている。

懐疑論は、一般の人(vulgar)⁴⁾の立場ではなく、哲学者の立場である。懐疑論者としての哲学者は、対象の同一性を否定する。一方形而上学者あるいは独断論者(dogmatist)としての哲学者は、実体的存在を立てる。すなわち、経験的知覚の背後に同一なる実体が存在し、その実体の変容として知覚的経験が生ずるとするのである。このような考え方は例えば、運動(motion)とか固体性(solidity)を持つ第一性質を立てる説に見られる。実体として第一性質を持つものが、感官に作用して具体的感覚内容としての第二性質(secondary quality)(例えば、色とか音)を生むとする説である。ヒュームはこの説を立てる者の名を挙げていないが明らかにJohn Locke(1632-1704)の説である。⁵⁾しかし、ヒュームは第一性質も第二性質同様、知覚にその根拠を持つのであって、敢えて第一性質を形而上学的に想定することは妥当でないとする。⁶⁾懐疑論者としての哲学者は、対象の同一性を認めることはできない。独断論者としての哲学者の見解は受け入れ難い。

ヒュームは、哲学者として懐疑論の立場を取りつつも、知覚の流れの

中に同一対象を認める一般的常識の立場を無視することができない。哲学的懐疑よりはむしろ常識の方がヒュームに力強く迫ってくる。例えば、外でドアが軋む音が聞こえるなら、見えてはいないがドアが存在すると考える。又、手紙を受け取った場合、手紙が送られて来た過程が存在すると考える。これが常識である。“ここに私は、たとえ世界が私の知覚に現存していなくとも、世界は何か実存的なものであり持続するものであり、その存在を維持するという考えに自然に導かれる。”⁷⁾同一なる対象の存在に関しては三つの意見があるとされる。“一つは一般人の意見、一つは誤った哲学者の意見〔形而上学者の意見〕、一つは真の哲学者の意見〔懐疑論者の意見〕であるが、真の哲学者は誤った知識をもつ意見よりは一般人の意見に接近するものである。”⁸⁾ヒュームは、一般人の立場に救いを求めようとするのである。

それでは、一般人における常識的判断の実体は何であろうか。常識的判断は常識的であるとするのはあまりにも知的でない。ヒュームはここで、常識的判断に関して、懐疑論とは異なった方向でもって哲学的分析を行おうとするのである。同一なる対象の存在の主張に関しては、懐疑論も独断論も無効であった。“それ故、全体的にわれわれの理性は、いかなる前提においても持続し明確なる対象の存在を確証しないし、又することができない。したがって同一なる対象が存在するという意見は想像力 (IMAGINATION) によらねばならない。そしてこれが今やわれわれの探究の主題とならねばならない。”⁹⁾とされる。すなわち、同一なる対象は、理性によっては見出されない故に、想像力の働きの中に求められるのである。常識的判断は、想像力の働きの中で行われているとヒュームは主張するのである。

想像力の働きは、実は因果関係の設定の時にも問題となった。因果関係が理性によって推論されるものでないことは、同一なる対象に関してと同じ立場にある。二つの対象間の因果関係は、両者の間に知覚上の恒

常的關係が繰返されることによって想像力の中で確認されるのである。対象間の因果關係を把握することは、対象を知ること以外にない。この意味で、想像力は知識を獲得する力、いわゆる悟性 (understanding) である。ヒュームは悟性を“想像力に関しての一般的にしてより確かに確立された特質 (the general and more established properties of the imagination)”と規定している。¹⁰⁾因果關係も同一なる対象も想像力によって生ずるものであるが、經驗的知覚との關係において両者は同一ではない。因果關係においては原因と結果の両項は知覚されているにも拘わらず同一対象は全く知覚と關係しないからである。ヒュームは、同一なる対象を主張する見解について、“この見解はそれが全く非合理的である故に、悟性とは別の能力から生ずるに違いない。”¹¹⁾と述べる。同一なる対象は知覚とは關係しないが故に、同じ想像力の働きといえども、原因・結果の両項が知覚に關係している因果關係成立の際に働く想像力 (悟性) とは異なるとしたのである。

しかし、対象の同一性を確定する際に働く想像力は無謀なるものではない。ヒュームは想像力に“恒常的で抗し難く普遍なもの”と“変化し易く、弱く、不規則なもの”¹²⁾とを区別している。そして“前者は、われわれの思考と行為の源泉でありそれを除くならば人間性はただちに滅亡してしまふに違いない。”¹³⁾と述べる。ヒュームは、道理に合うものは快 (pleasure) をもたらし道理に反するものは不安 (uneasiness) をもたらすという考えをもっており、対象の同一性の観点にこの原理を当てはめて次のように述べる。“しかしながら、類似する知覚の抵抗のない継起が、それらの知覚の同一性を付与するとき、われわれは、ためらいなくその意見に同意するのである。”¹⁴⁾したがって、対象の同一性も、“想像力に関しての一般的にしてより確かに確立された特質”としての悟性によって把握されているといえるのではなからうか。

2

ここで自我 (self) の問題に移ることにする。今まで物質界における対象の同一性を論じるに際して用いられたと同じ論法がこの問題に対して適用されるのである。しかしここで自我の占める位置を確認しておきたい。ヒュームによれば感情 (passion) は知覚 (これには直接的感覚的なものに関係する印象—impression—と印象の活力の薄れたものとされる観念—idea—がある) から反省 (reflection) 作用を経過して生じたものであるとされる。したがって感情の基礎には物質的現象がある。ヒュームの哲学は知覚を根源としているのであり、いわば知覚的一元論とでもいべき側面をもつ。知覚に対して、理性・反省・想像力などの種々の心的機能が働いて精神・物質的とでもいえる現象界が形成されるのである。しかし自我はこの現象界において独自の存在をもつものではなからうか。すなわち自我はあらゆる現象の担い手と考えられるからである。しかし自我の問題に入る前に、ヒュームによる古典的実体論の批判ならびにヒュームによる精神概念について概観したい。

ヒュームは、知覚的現象の背後に存するとされる実体を排撃する。“古代哲学者の見解すなわち実体と属性という虚構や実体的形相と実体に存する秘せられた特質に関する推論などは、暗闇における亡霊 (the spectres in the dark) のようなものである。”¹⁵⁾とされ次のように述べる。“われわれは知覚以外にいかなる観点ももたない。実体は知覚とは全く別のものである。われわれはしたがって実体観念をもたないのである。・・・知覚は物質的あるいは非物質的実体の属性なのかという問はわれわれがこの問の意味を理解しないのだから答える可能性が存在しないではないか？”¹⁶⁾このように実体を立て、その実体に何か神秘的な特質を与えることは極めて古代的であり近代以前の考え方である。ロックの第一性質には第二性質を生みだす力 (power) があるとされているが、この力という

概念はいかにも神秘的な特質である。¹⁷ヒュームはこのような発想を次のように揶揄する。“この傾向は一寸した反省があれば抑制されるのである。しかし、子供とか詩人とか古代の哲学者の中にはよく見られるのである。”¹⁸デカルトは精神と物質が渾然一体となったアニミズム的観念を打破して精神と物質を区分した。しかし、いまだに実体観を維持していたのである。ヒュームはデカルトにおけるアニミズム的残滓をも払拭したものと見える。デカルト的二元論には、物質と非延長としての精神の共存の問題、精神と物質のかかわりの問題が生ずる。しかし、ヒュームはこのような問題も知覚的現象の次元から眺めれば容易に解決されることを詳細にわたって論じている。

それではヒュームは精神 (mind) をどのように捉えていたのだろうか。ヒュームは精神を“一定の関係によって結ばれた諸知覚の堆積あるいは集合であり、誤って完全な単純性と同一性が与えられている。”¹⁹と規定する。さらには、“心は一種の劇場 (theater) であり、そこでは諸々の知覚が継起して現れ、行きつ戻りつし、あるいは消失しつつ無限の変容をもつのである。精神の中にはいかなる単純性も同一性も存在しない。たとえわれわれがこのような単純性と同一性を想定する傾向性があるともである。劇場という比喻はわれわれを迷わすに違いない。精神を構成するのは継起する知覚のみである。われわれは、これらの知覚が生ずる場所に関する考えあるいは精神を構成するところの質料に関する考えをもち合わせていない。”²⁰精神を一種の劇場としていわば実体化しながらそれを取り消しているところにヒュームの面目躍如たるところがある。

しかし自我と精神とは同一ではない。自我は精神に伴うものあるいは精神は自我に伴うものである。そして当然自我は同一なるものと考えられる。しかしヒュームは従来考えられて来た実体的自我概念を次のように呈示する。“われわれが自我と呼ぶところのものを常に直接意識してい

ると考える哲学者が存在する。彼等によると、われわれは自我の存在を感ずるのであり、又、自我の持続性を感ずるとされ、証拠なしに自我の完全なる同一性と単純性に関して確信しているのである。”²¹⁾そしてこの自我概念を次のように批判する。“不幸にもこれらの責極的主張は、これらの主張のために必要とされる経験的即応を欠くのである。われわれはここで説明されているような仕方では自我の概念をもっていないのである。”²²⁾一見、自我が経験されているように思われているが、実際にそのような経験はないのであり、自我について言われている単純性・同一性などは形而上学的思弁である。ただそれに気付かれていないに過ぎない。自我を考える時に現実には、同一の自我ではなく種々の知覚が存在する。“私の場合、私が私自身と呼ぶものに直接かかわるとき、常に、熱いとか冷たいとか、明るいとか暗いとか、愛とか憎しみとか、苦とか快などのある特殊な知覚に出会うのである。私は知覚なしに私を捉えることはいつだって出来ないし、知覚以外のものを観察することはできない。”²³⁾

自我は精神と同様に知覚の束として考えられている。精神を一般的に捉えた場合、そこに見られるのは知覚の継起のみであり、例えばそれらが継起する場所として劇場のようなものを考えても、それに対応をする知覚はない。したがって精神の同一性という問題は意味をなさない。しかし自我は知覚されている。私の諸知覚は全く同一ではないが、劇場とは異なり知覚されているのである。したがって自我の同一性の問題は、物質界における対象の同一性と同様になる。この点ヒュームは明確である。“そしてここでは次のことは明白である。すなわち、植物・動物・船・家あるいは人工又は自然の全ての複合物(それらは変化するのであるが)に関しての同一性を説明する際に用いられたのと同じ推論方法が有効なのである。”²⁴⁾そして人間の心に付与される自我の諸知覚もよく調べてみればそれぞれ異なることを述べた後に“しかしながらこのような区別と分離性にも拘わらず、われわれは知覚の流れ全体が同一性によって結合

されていると考えるのである。そして「われわれの種々なる知覚を現実
に結びつける何ものかが現実に存在するのか、あるいはそれらの知覚を
想像力の中で単に連結するのか」という疑問が自然に生ずるのである。
すなわち、別の言い方をすれば、人格の同一性(the identity of a person)
に関して公言するに際して、われわれは知覚の中に現実の結合を見る
(observe) のか、あるいはわれわれは知覚に関する観念の間に結合を単
に感ずる (feel) ののであるかということである。”²⁵⁾ヒュームは知覚の間
には現実に結合関係を経験することはできないとして、“想像力(imagina-
tion)において知覚の諸観念が結合することから同一性という特質が得ら
れるのであり、われわれはその特質を知覚に与えるのである”²⁶⁾という。
尚、人格の同一性は時間的に過去とかがかわる故、気憶(memory)が大き
な役割を果たすことが敷衍的に述べられる。このように自我の同一性は、
物質的事物間における対象の同一性と同様に、知覚間に想像力によって
想定されるところに根拠づけられるのである。

しかし、ヒュームの自我の同一性に関する議論は、果たして整合的で
あろうか。自我は全ての知覚的現象世界、すなわち精神・物理的現象世
界の担い手である筈である。しかし、その担い手自身が、知覚的現象の
次元から捉えられている。自我の同一性を使ってはじめて現象界の同一
性が確立されるのであるが、現象から自我の同一性を確立するというの
は矛盾ではなからうか。

3

ヒュームは、物質界の対象に関してであれ自我に関してであれ同一性
の議論において常に動揺している。すなわち同一性は想像力の所産と言
いながら、同時に言い淀む傾向が見られる。同じ想像力の所産といえど
も因果関係は蓋然的であるとされるので、知覚の相対性と論理的に矛盾
することがないが、同一性と相対性とは明らかに矛盾するからではない

か。しかし、ヒュームの議論を通して認識とは何かという問題について考えさせられることが多い。同一性とは、ヒュームのいう通り事実の問題ではない。ヒュームは同一性を認識の中に組み入れようとしたが、同一性は認識というよりは意味の次元から考えられねばならないのではないか。そして認識と意味とは離れ難い関係にあるのではなかろうか。

ヒュームの議論をみると齒がゆい印象を受けることであろう。哲学は確固とした根本原理の上に構築されるのが本筋であると思われる。そもそも因果関係を論ずるにしても、関係する二項が同一なるものと確定されなければならないであろう。又、何ものかが同一であるためには、それに常に伴っている自我の同一性が前提されなければならない。ところが、自我の同一性を論ずる際に自我の諸知覚が前提されているが、自我の知覚そのものは自我の同一性なしには意味をなさないのではあるまいか。哲学の中に確固とした何ものかを求めようとする人々は、ヒュームの哲学に接して失望するどころか、日常的な確かさも危うくなるのを見て怖れを感じることであろう。

それならば、ヒュームの哲学的方法にはどのような意義があるのだろうか。ヒュームの意義は、従来 of 形而上学的概念の批判にある。古来、哲学者達は、実体としての物質・精神・自我などの概念を形成して来た。しかし、これらの概念は知覚のような何等ししっかりした拠り所をもたず、想像力というより空想力の所産である。ヒュームのいう通りこれらは“暗闇の亡霊”である。そして哲学者はこの亡霊の虜となって身動きの出来ない状況になっているのではなかろうか。デカルトにおける身心関係の問題がよい例である。ヒュームは、このような形而上学的亡霊から哲学を解放しようとしたのである。そこで、確実に信頼できるもの、すなわち経験に基づいて思考を行ったのである。ヒュームの経験論は懐疑論になり懐疑論は常識の世界に救いを求めた。この側面をみるとヒュームの哲学には生温さを感じずるかもしれないが、ヒュームの批判的精神には鋭

いものがあることを見逃してはならない。従来、絶対確実なものとしていた実体的世界・自我を破壊した。ヒュームは『自然宗教の対話』においては、神をも哲学の世界から追放したのである。²⁷⁾このことは当時においては驚くべきことであつたろう。ヒュームの批判的精神は哲学の再構築に向けて大きなインパクトを与えたのである。カントは『プロレゴメナ』で次のように言っている。“私は次のように告白する。デヴィッド・ヒュームは数年前にはじめて独断論のまどろみを打ち破り、思弁哲学の分野における私の探究に全く別の方向を与えたのだ。このことを私は想います。”²⁸⁾哲学の再構築というべきカント哲学は、ヒュームの懐疑論を俟ってはじめて可能であつた。そして今だにヒュームの批判的精神は、特に英米の哲学の中に生きついている。

ヒュームの経験論の立場は、懐疑論を生んだが、常識の世界へ道を開いた。このことの意義は大きいと思う。ヒュームは生きた世界に対して常に忠実であろうとするのである。そこから一度、懐疑論的立場から否定された世界・自我・神が取り戻されてくる。“真の懐疑論者は、彼の哲学的確信ばかりでなく彼の哲学的懐疑に対しても独断的ではない。そして、確信あるいは懐疑を考慮した時に生ずる素朴な満足をいかなるものといえども拒否しないのである。”²⁹⁾というヒュームの心は、生きた世界に向かって広げられている。

注

本論で使用したヒュームの文献は、David Hume, *A Treatise of Human Nature*, reprinted from the original edition in three volumes, and edited, with an analytical index, By L. A. Selby - Bigee, MA, Oxford at the Clarendon Press, first edition 1888, reprinted 1965である。Humeとあるのは全てこの文献による。尚邦訳では、デヴィッド・ヒューム、人生論（全四巻）、大槻春彦

訳、岩波文庫、1948—1952、1995がある。

- 1) Hume, 14—15.
- 2) 知覚 (perception) とは感覚器官 (sense) から生じたものであり、色や音などの直接的印象 (impression) と印象の活力が弱まることによって生ずるとされる観念 (idea) とで構成される。
- 3) Hume, 220.
- 4) Humeは常識的一般人を表すのにvulgarという言葉を用いる、この言葉は著作の中に頻出している。
- 5) John Locke, *An Essay Concerning Human Understanding*, collated and annotated, by Alexander Campbell Fraser, in two volumes, Dover Publication, New York, 1959, の volume, 1, Chapter V111参照。
- 6) Hume, 192—193.
- 7) ibid, 197.
- 8) ibid, 223.
- 9) ibid, 193.
- 10) ibid, 267.
- 11) ibid, 193.
- 12) ibid, 225.
- 13) ibid, 225.
- 14) ibid, 206.
- 15) ibid, 226.
- 16) ibid, 234.
- 17) John Lockeの上掲書 178—182頁参照。
- 18) Hume, 224.
- 19) ibid, 207.

- 20) *ibid*, 253.
- 21) *ibid*, 251.
- 22) *ibid*, 251.
- 23) *ibid*, 252.
- 24) *ibid*, 259.
- 25) *ibid*, 259.
- 26) *ibid*, 260.
- 27) David Hume, *Dialogues Concerning Natural Religion* 尚ヒュームは他に *The Natural History of Religion* において宗教の痛烈な批判を行っている。
- 28) Immanuel Kant, *Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik*, Verlag von Felix Meiner, Hamburg, 6 – 7.
- 29) Hume, 273.